

文化財探検シリーズ I

亀ヶ城の歩き方

県指定史跡猪苗代城跡附鶴峰城跡

亀ヶ城略年表

○鎌倉期

- ・文治5年(1189) ※義連公入国地形を利し、猪苗代城浜崎城小田山城を築城『葦名道達覚書』(大正14年)
- ・建久2年(1191) ※建久二年佐原経連築き住す八手山城を亀ヶ城と称す『会津古壘記』(文化10年-1813)

○南北朝～室町期

- ・文明14年(1482) 会津猪苗代亀城修葺成就『異本塔寺長帳』(寛永12年-1635)

○安土桃山期-16C後半

- ・天正17年(1589) 五日辛巳。天氣好、～成実ハ書院ノ西方堀際へ出て見ルニ、敵ノ備へ数多く見ヘタリ。公は摺上ノ方ノ見ユル櫓ニ登リ玉ヒテ御覽アリ。…『貞山公治家記録』
伊達政宗会津侵攻 摺上原合戦 猪苗代城主 猪苗代盛国
- ・天正18年(1590) 蒲生氏郷会津入部 猪苗代城代 蒲生郷安・町野左近
- ・天正19年(1591) 猪苗代城代 玉井数馬
- ・文禄元年(1592) ※黒川を若松と改名、若松城天守閣竣工 ※猪苗代城も平行して改修か?
- ・慶長3年(1598) 上杉景勝入部 猪苗代城代 今井源左衛門・水原親憲
- ・慶長6年(1601) 蒲生秀行入部 猪苗代城代 関十兵衛・岡越後・岡左衛門佐

○江戸前期-17C代

- ・元和8年(1622) 狐至城ト云猪苗代令修営新築一廓『富田家年譜』
- ・寛永4年(1627) 加藤嘉明入部 猪苗代城代 堀主水 ※以後番頭交代
元和(1615～1624)の末まで半坂の西北より新町本町の南東まで外郭ありて墮をめぐらし土居ありて五門を開きしが、加藤氏の時毀ちしや今はなし『新編会津風土記』
- ・寛永20年(1643) 保科正之入部 猪苗代城代 沼沢出雲
- ・正保元年(1644) 猪苗代御城内御座向門堀石垣土手堀柵等、御御普請御修復之御用…『家世実紀』
- ・万治2年(1659) 猪苗代御城御本丸石垣、御修補被仰付、二月晦日、猪苗代御城御本丸之石垣、丑寅(北東)併未申(南西)二ヶ所、地震ニテ崩レ候故、御修補之儀、御老中様へ…『家世実紀』
- ・貞享4年(1687) 猪苗代御城石垣御普請、本丸与ニノ丸江出口之沓ヶ所、当二月中崩候二付、絵図面を以御老中様へ～当廿三日御普請取懸り、如元御修理成就、『家世実紀』
- ・元禄4年(1691) 猪苗代御城江時鐘被相設、猪苗代ニ是迄時之鐘無之候処、御祭之…『家世実紀』
- ・元禄6年(1693) 猪苗代大風雨、今夜猪苗代烈敷風雨二付御城二階御門之石垣、東之角与西之方へ幅貳間、根石際迄高八尺相崩候、…『家世実紀』
- ・元禄7年(1694) 猪苗代御城中御座向御城代屋敷御普請成就、猪苗代御城中～御修復之儀其筋与申出、～当分御用ニ無之座向者取毀、其跡へ広間番所相建候様被仰出、『家世実紀』

○江戸中期-18C代

- ・元文元年(1736) 御城中棟門石垣御普請人足百拾三人辰五日御指紙一通～『岡部家文書』
- ・延享3年(1746) 乍恐以追願書申上候事一猪苗代御城ニテ當秋石垣御普請二付～『岡部家文書』
- ・安永3年(1774) 御城焰硝蔵自生古以於～同秋九月令成就千秋萬歳『猪苗代城跡火薬庫石壁碑文』
- ・天明8年(1788) ※藩主容頌軍制改革、土津神社と亀ヶ城守備の職制定める。
- ・寛政元年(1789) 猪苗代城本丸東西一七間程南五六十間程二ノ廓南へ三十間程北へ二十四五～『会津鏡』
- ・寛政4年(1792) 猪苗代士甲冑彼地御城内へ納置度由、～二階御門上へ差置可然候、～『家世実紀』

○江戸後期～幕末期-19C代前半

- ・享和2年(1802) 猪苗代御城中割場焼失、～貳間半梁二行間貳拾貳間半不残致焼失候、～『家世実紀』
- ・慶応4年(1868) ※8月21日戊辰の役により落城

○近代

- ・明治38年(1905) 小林助治・才治親子を中心とした町内有志により桜の植樹、45年より公園として整備
- ・平成13年(2001) 福島県指定史跡

亀ヶ城の歩き方

1 城跡の概要

亀ヶ城の雅称で親しまれる猪苗代城跡と鶴峰城跡は、JR猪苗代駅から北へ約1.7kmの福島県耶麻郡猪苗代町字古城跡7150-1他に位置する。その立地は、磐梯山麓より猪苗代湖北岸の沖積地へ突出した赤埴火山体(古期-30万年前以降)の火山性泥流(岩屑なだれ)堆積物で構成される土町層の南北に長い馬ノ背状の細長い小丘陵を利用して築かれており、この尾根を東西に分断する掘切を境として、北に鶴峰城跡(標高555m)、南に猪苗代城跡(標高551m)が並立する。

城跡の周辺には、延喜式内社の磐梯神社や会津藩祖保科正之を祀った土津神社があり、古くから当地方の中心を成していた地域である。

文献では猪苗代城跡は、奥州征伐の論功行賞によって会津四郡を与えられたとされる佐原義連の孫経連を初代とする猪苗代氏が代々居城にしたとされ、その築城年代については一般に建久2年(1191)といわれるが、これは『会津古堡記』(文化10年-1813)など後世の文献からの引用であって確証がなく、城跡の構造や出土遺物、『示現寺文書』『白河証古文書』『塔寺八幡宮長帳』等の猪苗代氏に関する記事や『異本塔寺長帳』の修復入城の記事から、現時点では南北朝から室町期にかけて築城されたものと考えられる。

やがて猪苗代氏は天正17年(1589)の摺上原合戦で伊達方についてこの地を去ることとなり、その後猪苗代城は、天正18年(1590)豊臣秀吉の命により会津に入部した蒲生氏郷によって近世城郭へと改修され、近世を通じて会津藩の東を守る支城として存続し、幕末の慶応4年(1868)戊辰の役で焼失するまで、当地方支配の重要拠点として機能し続けた。

また隣接する鶴峰城跡は、文献から猪苗代氏代々の隠居城と伝えられているが、当初は亀ヶ城の分郭として機能していたものと考えられ、その後近世初頭に猪苗代城跡が大改修を受けたのに対して手が加えられなかったため、柵列や石積虎口など戦国末期の古い段階の遺構が残されている。



位置図



空中写真

2 城跡の構造

a. 縄張と普請

猪苗代城跡は、猪苗代氏の主城であった中世段階と会津藩の支城として機能した近世段階に大きく分けて考えられ、前者の構造は本丸にみられる丸味を持った縄張り、後者の構造は二ノ丸・三ノ丸にみられる直線的な縄張りとして区別される。

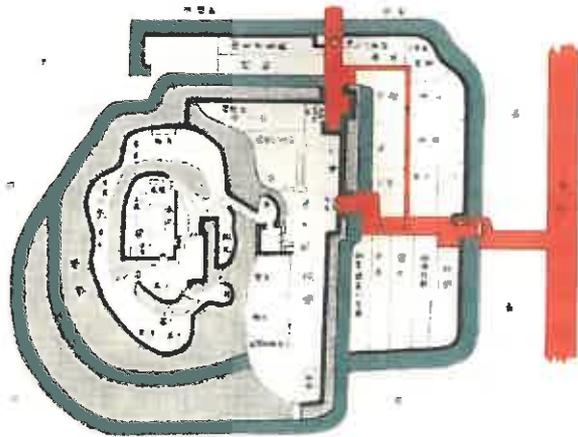
中世段階の縄張は、現在の山城部分が中心であったと考えられ、その規模は東西220m×南北270mの59,400㎡を計ります。丘陵頂部には土塁で囲んだ東西27m×南北76mの南北に長い本丸(標高551

m)と東西26m×南北40mの二之郭(標高549m)を置き、一段下がってその周囲に帯郭(北帯郭—東西65m×南北24m・標高539m、西帯郭—東西10m×南北45m・標高544m、南帯郭—東西21m×南北29m・標高543m)と胴丸(標高538m)を設け、これらを大きな空堀で囲んだ輪郭式の山城である。

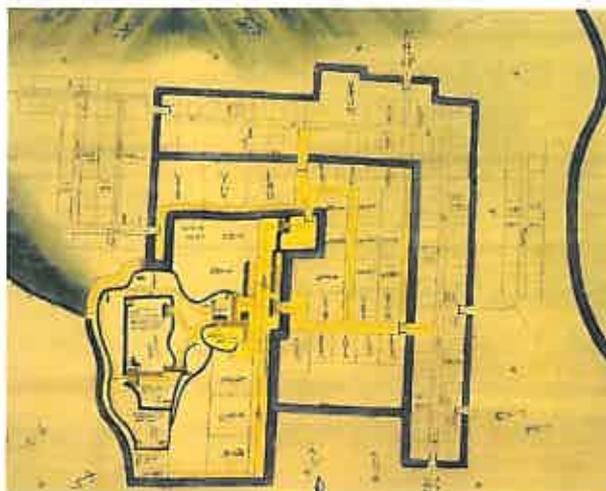
近世段階の縄張は東側に大きく拡張され、山城部分を本丸とし、東側の平地に土塁と堀で囲んだ二ノ丸(東西70m×南北300m・標高525m)と三ノ丸(東西320m×南北320m・標高524m)を設けた梯郭式の平山城で、二ノ丸の北東隅には升形の千人溜、三ノ丸の北東隅には横矢掛けの屏風折れがみられます。その規模は城下町として町屋を取り込んだ総構まで含めると東西520m×南北540mの280,800㎡を計る。石垣は本丸の東側を中心に、升形虎口から本丸に至る大手道沿いの各所に部分的に配置され、防御としての実質的効果というより城の威厳を誇示するための装飾的効果が強く認められ、逆に西側は深い空堀と高い土塁、さらに横堀と堀切に通じる空堀が設けられ、大規模かつ簡易な普請によって幾重にも防塞されている。

鶴峰城跡の縄張は、南北に縦走する尾根を縦堀で分断して本丸を築き、西・東面の急峻な自然地形を巧みに利用して、分郭や細長い平場、石積の枳形虎口や石塁等を配置した城跡で、その規模は東西125m×南北175mの21,875㎡を計りますが、構造や規模、施設など現在の猪苗代城跡にみられる様相とは大きく異なっている。

本丸は東西37m×南北100mと南北に細長い郭で、標高は555mを計ります。周囲には土塁が巡らされ、北東隅には一



『耶麻郡誌』所収猪苗代城之図



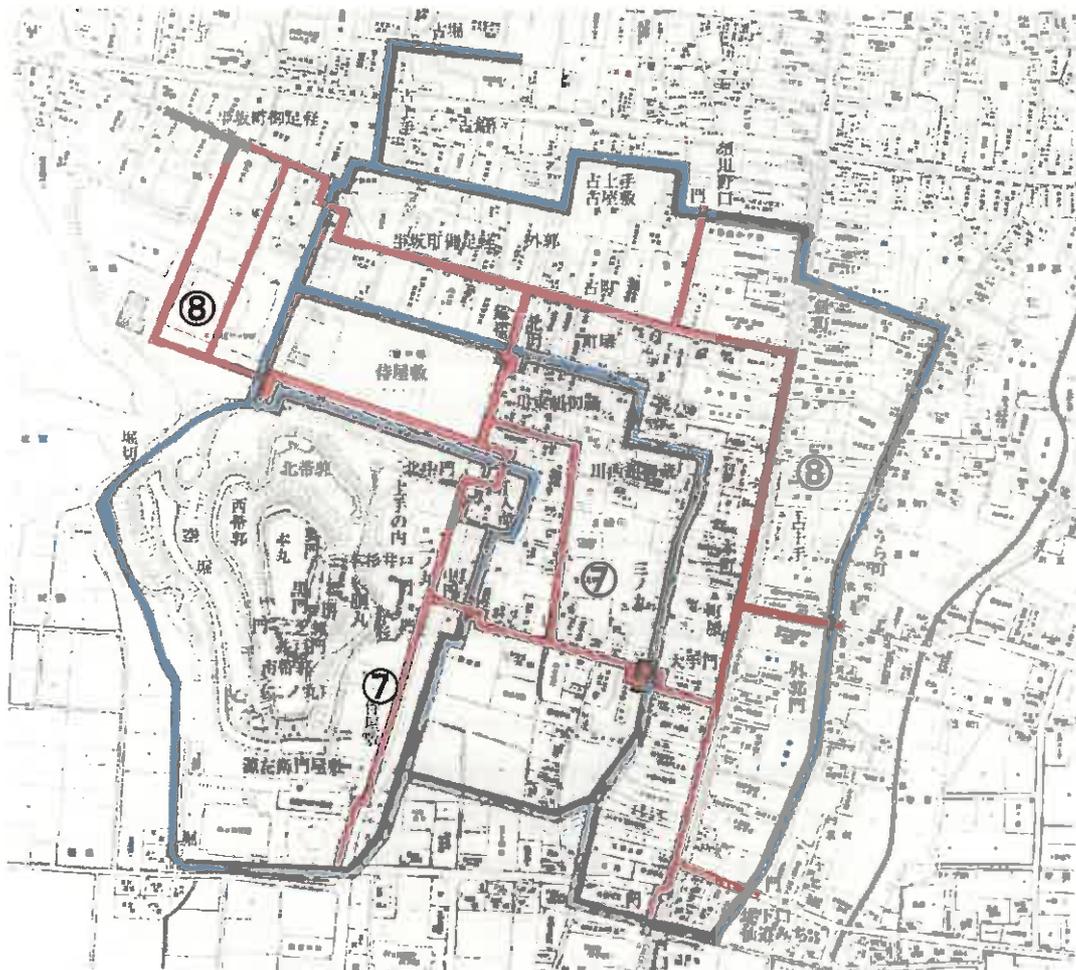
会津図書館所蔵猪苗代城絵図

段高く東西10m×南北8m(標高556m)の檜台と推される方形の平場が設けられていて、虎口は土塁の途切れた東側中央部と分郭と接する南西部分に認められる。分郭は3段の平場(上段-東西9m×南北16m・標高553m、中段-東西14m×南北17m・標高548m、下段-東西6m×南北10m・標高546m)で構築され、本丸の南西部に取り付き、上段のみ虎口で本丸と連絡されている。このほか東西の丘陵斜面には、上方から



土津神社神料所田図

中位にかけて細長い平場、北西側斜面の上方には土塁と平行する布堀による柵列、西側・北西斜面の中位には石積の升形虎口が設けられ、本城はこれら施設の配置から、西側の防塞に主眼をおいた城造りとなっている。



猪苗代城跡複合図

b. 城内の作事と城下

- ・城 内 本 丸 屋形・隅櫓1・門2
 二ノ郭 門3(櫓門・井戸門・搦手門)・腰掛(多門南)・土蔵(兵器庫)
 帯 郭 番所4・塩硝穴蔵・蔵(塩硝)・角場(放銃教場)・門・胴丸
 二ノ丸 城代屋敷(学館・武学寮)・稻荷神社・門2・作事場・馬場・腰掛(中門南)
 三ノ丸 土屋敷・的場・門2・鐘撞堂・米倉2屋
- ・城 下 本町・名小屋町・新町・古町・九軒町・堤町・中町・土町・社人町・半坂同心町
- ・足輕町 今泉・五十軒



猪苗代城跡本丸地形図



本丸 ⑤



二ノ郭 ④



北郭 ⑥



西郭 ⑥



南郭 ⑥



空堀 ⑥



升形虎口・朋丸 ①



稻荷神社 ⑨

3 猪苗代城跡の散策

a. 猪苗代城跡の石垣 ①

亀ヶ城公園駐車場から城跡へ登る東側の
大手道沿いには、大手口多聞櫓台石垣・二
ノ郭櫓門台など多くの石垣が設けられてお
り、野面積・打込接・切込接など様々な石
積技法がみられ、文献からこれらの多くは、
倒壊と修築によって形を変えながら存続し
てきた石垣であることが分かる。



大手口多聞櫓台石垣

これらの中で升形虎口の北側に位置する
多聞櫓台石垣は、唯一当初の姿を今に伝える
野面積の石垣であり、その積み方は自然
石を主体に割石を部分的に交えた目地の通

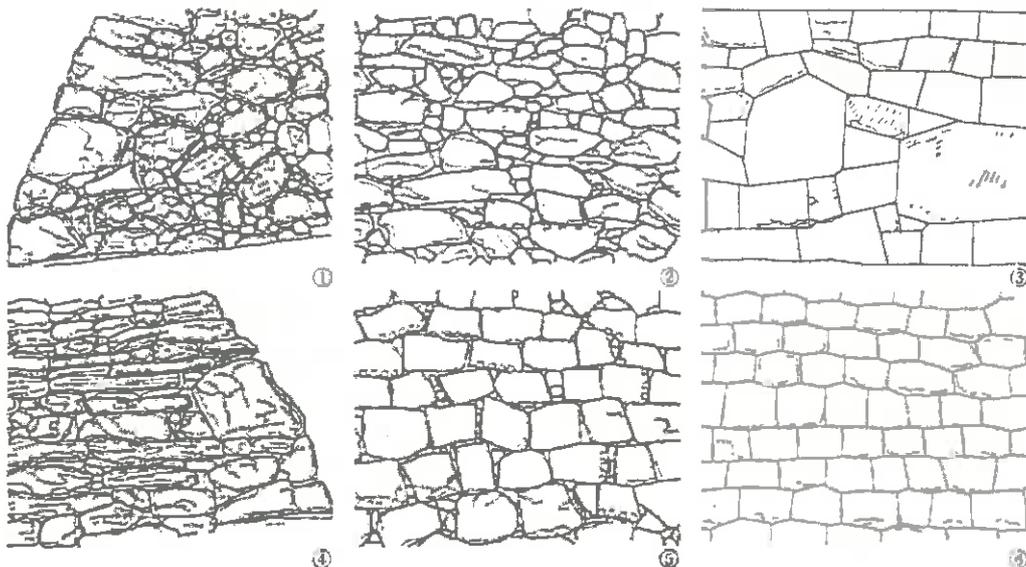
らない布積み崩しで、隅角部の稜線は緩く矩のみであり、角石は不均等な石を交互に引き違え、
挾石で角度を調整し、隅脇石は発達せず築石を代用している。同様の積み方として若松城天守
台石垣があり、その年代観から文禄～慶長期(160末～170初)に属す石垣と考えられる。

また威厳を示すために据えられた鏡石が、この多聞櫓台石垣、升形虎口法面石垣、胴丸北側
法面石垣に組み込まれている。

そして城跡の西側は石垣が配置された東側とは異なり、大きな土塁に守られているため、石
垣は本丸隅櫓台石垣のみであって、この事から猪苗代城跡の石垣は、城の表空間を演出するた
めの装飾・威厳性が強い石垣群であった事が窺える。

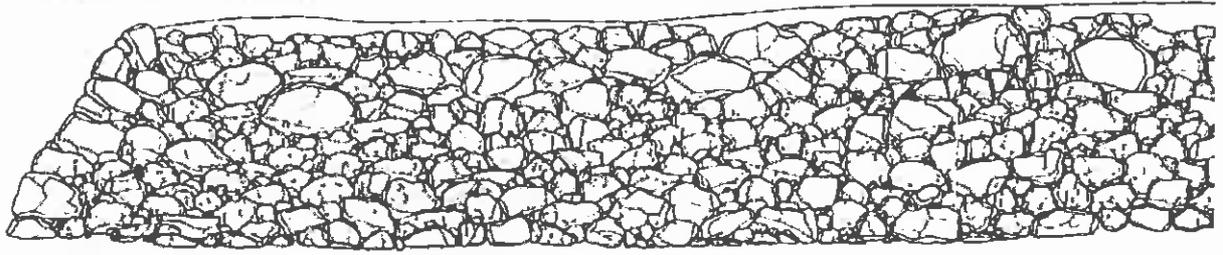
城の石垣は、石材の加工の程度と積み方を組み合わせることで分類することができる。
加工法では、野面積（自然石のまま）・打込接（接合面を削削工）・切込接（接
合面を完全に加工）の三種。積み方では、乱積（段目地が通らない）・布積（段
目地が通る）・廻り積（大角部に石を据える）・寄積（割めに石を落とす）の
四種。

		加工法		
		野面積	打込接	切込接
積み方	乱積	①	②	③
	布積	④	⑤	⑥

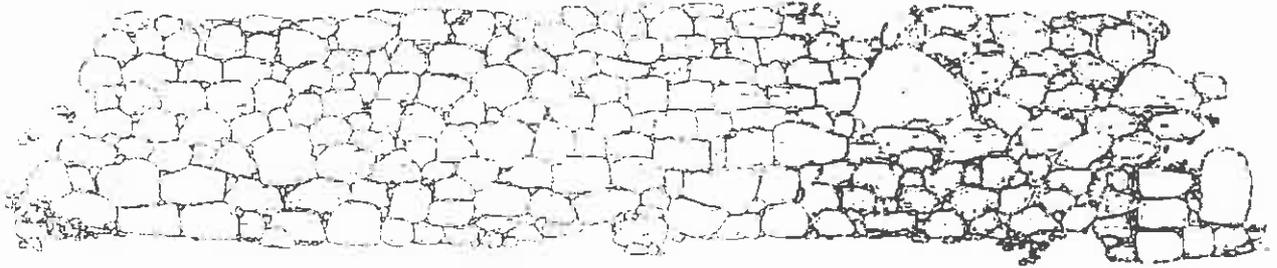


石垣の種類

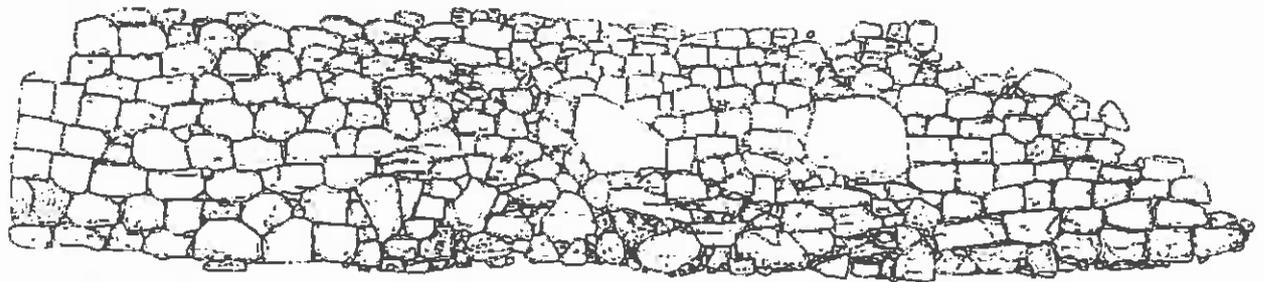
大手口多聞櫓台石垣 (A石垣)



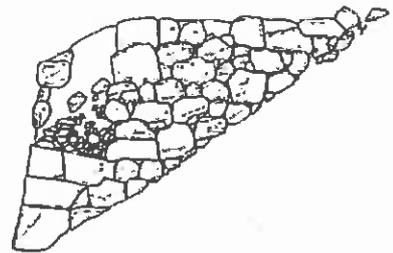
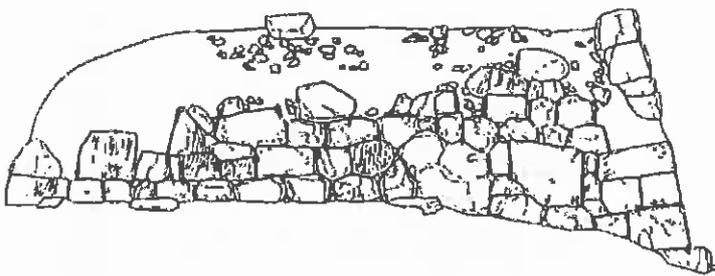
大手升形虎口法面石垣 (B石垣)



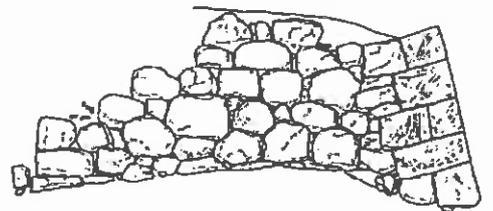
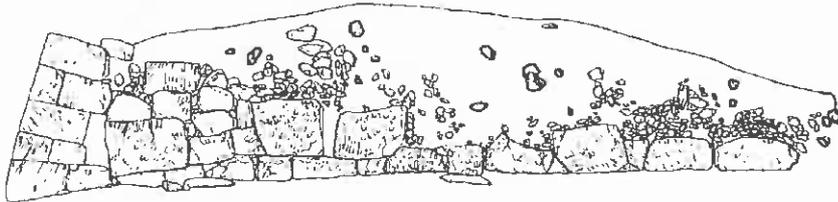
帶郭法面石垣 (D石垣)



二ノ郭櫓門台石垣 (F石垣)



二ノ郭櫓門台石垣 (G石垣)



b. 三本杉井戸 ②

猪苗代城跡には、2つの井戸跡がある。1つは大手口多聞櫓台石垣内側の三本杉井戸、1つは南帯郭東側の空井戸で、その構造は何れも石組の丸井戸である。

前者の井戸跡は、三坂春編がまとめた江戸時代中期の奇談集『老嫗茶話』三巻「猪苗代之城化物」に登場する大入道が、水を飲んでいた井戸である。化物の正体は古たぬきであるが、城代の前にもかむろに変化して登場する。このかむろが「亀姫」で、姫路城天守に住む妖姫長壁姫を題材にして泉鏡花が著した『天守物語』にも引用され登場する。

『老嫗茶話』で語られた両姫の関係は分からないが、播州皿屋敷のお菊井戸の話など、井戸にまつわる奇談が両城に伝えられている。

また後者の井戸跡は、二ノ郭井戸門の階段を下ったところにあり、本丸の屋形や籠城に際して水を供給するために開削された井戸であったと考えられる。

c. 大手道と搦手道 ③

大手道は、表口より本丸へ通じる道で、冠木門より升形虎口に入り、大手階段を昇ると洞丸北側の法面石垣にぶつかる。その南側に設けられた階段をさらに昇ると北と南に分かれる合坂があり、末広がりの南側階段を昇ると二ノ郭入口の櫓門に入る。そして二ノ郭北側に設けられた黒門を通して、本丸に至る表側の通路である。

また合坂の北側階段を昇ると、本丸東側の裏門に通じている。

搦手道は裏口にあたり、二ノ郭西側の西門から南に下り、帯郭として繋がっている南郭・西郭へ通じる裏側の通路である。

大手道は昭和34年の失対事業の一環で、コンクリート階段となり破壊されてしまったが、搦手道の階段はそのまま遺存しており、当時の排水側溝と階段の踏面石が確認できる。



三本杉井戸



空井戸



大手櫓門前階段



搦手階段

『老嫗茶話』三巻「猪苗代之城化物」

会津藩の領主が加藤嘉明、明成父子であったころ、猪苗代城の城代は、禄一万石の堀部主膳がつとめていた。

寛永十七年十二月、主膳がただひとり座敷にいたとき、どこからともなく禿(かむろ)が来て言った。「おまえは久しくこの城に居るが、いまだ当城の主に御目見えしていない。急ぎ身を清め、袴を着て参れ。今日は御城主が御礼をお受けになるとの上意である。謹んで御目見えつかまつれ」

主膳は、禿を睨みつけて叱った。「城主はわが主人明成、城代はこの主膳である。ほかに城主があるはずもない。たわごとを言う憎い奴め」

禿は笑って、「姫路のおさかべ姫と、猪苗代の亀姫を知らぬのか。おまえは、今ひとつの天運が尽き果て、また天運が改まる時であるのに気づかない。身の程知らずに過言を口にする、そんなおまえの命数も、既に尽きた」と言うや、消え失せた。

年が明けて正月元旦、主膳が諸士の年賀を受けようと、袴を着て広間に出たところ、広間の上段に新しい棺桶が据えられていた。傍には、葬礼の道具一式もそろえてあった。また、その夕方、何処の方からとも知れず、大勢が餅をつく音が聞こえてきた。正月十八日、主膳は便所で倒れ、二日後の明け方に病死した。

同年の夏、柴崎又左衛門という者が、三本杉の清水のそばで、身の丈二メートルを超える真っ黒な大入道が水を汲むのを見た。刀を抜いて飛びかかり、斬りつけると、大入道はかき消えて行方知れずとなった。

それからだいぶ経って、八ヶ森に大きな猪(むじな)の腐乱屍体があるのを、猪苗代の木地小屋の者が見つけた。以後、なんの怪事も起こらなくなったという。

『天守物語』抜粋

朱の盤 これに岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在る、奥州変化の先達、允殿館のあるじ朱の盤坊でござる。すなわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷出ました。当お天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄 お供御苦労に存じ上げます。あなた、お姫様は。

朱の盤 (真仰向けに承塵を仰ぐ) 屋の棟に、すでに輿をばお控えなさるる。

薄 夫人も、お待兼ねでござります。手を敲く。音につれて、侍女三人出づ。齊しく手をつく。早や、御入らせ下さりませ。

朱の盤 (空へ云う) 輿傍へ申す。此方にもお待うけじゃ。姫君、これへお入りのよう、舌長姥、取次がっせえ。階子の上より、真先に、切禿の女童、うつくしき手鞠を両袖に捧げて出づ。亀姫、振袖、裯襦、文金の高髻、扇子を手にす。また女童、うしろに守刀を捧ぐ。あと圧えに舌長姥、古びて黄ばめる練衣、襷せたる紅の袴にて従い来る。天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄 (そと亀姫を仰ぐ) お姫様。出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫 お許し。しとやかに通り座につく。と、夫人と面を合すとともに、双方よりひたと褥の膝を寄す。

夫人 (親しげに微笑む) お亀様。

亀姫 お姉様、おなつかしい。

夫人 私もお懐かしい。

d. ニノ郭櫓門 ④

ニノ郭は、櫓門、本丸表門(黒門)、井戸門、搦手門と多くの出入口を有し、兵器庫を置いた重要な郭であり、東側土塁の内側には土塁に駆け上がるための雁木が設けられている。その正門にあたる櫓門の規模は、桁行1.69m+3.93m+1.69mの3間、梁行1.90m+1.90mの2間を計り、威厳を整えている。本柱・寄掛柱の礎石や葛石が遺存し、出土遺物として三つ巴文の軒丸瓦や菊文の軒平瓦、鉄釘や乳金具などが発見されている。



二ノ郭櫓門

e. 本丸と隅櫓 ⑤

文献、絵図面から、本丸には屋形・茶寮・塩蔵・土蔵・庭・門・隅櫓・土塁・雁木・石段があったことが分かる。

試掘調査では、6間以上の礎石建物跡や掘立柱建物跡が確認されており、前者の礎石は抜き取られていたが、柱穴掘方の中に根石が残っている。また周囲を巡る土塁の内側には、高さの低い腰巻石垣と雁木が設けられている。出土遺物としては、明代の染付や瀬戸の輪花皿、初期の京焼など高級陶磁器がみられる。



礎石建物跡と整地層

この他大規模な整地層が確認されており、本丸平場や土塁の築成などの普請の跡がみられた。

隅櫓は南西隅にあり、絵図面では1層(図書館所蔵)として描くものと2層(神社所蔵)として描くものがある。



隅櫓跡

f. 各帯郭と西側の土塁・空堀 ⑥

絵図や文献から、北帯郭には番小屋と角場、西帯郭には番小屋、南帯郭には番小屋、土蔵、火薬庫があったとされ、発掘調査では北帯郭では掘立柱建物跡、西帯郭では竪穴遺構、南帯郭では柵列に伴う布掘りの溝跡が発見されている。また東側には崖下の升形虎口を見降ろす様に、分郭の代りとして胴丸が設けられている。

この他城跡の西側には、大きな空堀と残丘を利用した大きな土塁がみられ、その西側斜面にはさらに横堀が巡っている。



空堀と土塁

g. 二ノ丸・三ノ丸 ㉑

本丸の東側に築かれたが、何れも市街化が進み、その面影は殆ど見られない。

僅かながら中門付近には二ノ丸と三ノ丸の境に段差と水路、旧役場跡東側さる川跡の道路に横矢掛けの屏風折れと土塁の一部が残る、中門・大手門跡の道路に食い違いの跡が残る。

また旧役場跡の温泉センター建設工事に伴う試掘調査では、大きな三ノ丸を囲む堀跡が確認されている。



二ノ丸堀跡



三ノ丸土塁跡



三ノ丸堀跡

h. 城下と足軽町 ㉒

城下は城の北・東側に展開され、総構を含める城跡の規模は、東西 520m、南北 540m を計る。二ノ丸・三ノ丸同様その痕跡は殆どみられないが、総構の名残りとして東側の本町と裏町の境に、段差と金蔵寺川跡の水路がみられる。さらに東側の小黑川にも食い違いの通路がみられ、ここまでが城の範囲とすると猪苗代城跡の東側は四段構えとなる。

また猪苗代城絵図には、足軽町として今和泉、半坂南に町並みが描かれており、後者は猪苗代小学校の建設工事に伴う発掘調査で、北側より建物跡・井戸跡・塀跡などの屋敷跡の遺構、南側より堀跡・土塁跡が確認された。



総構の段差



足軽町井戸跡



足軽町南側の堀跡

4 鶴峰城跡の散策

a. 石積虎口跡 ①

本丸西側の斜面中位に設けられた石積虎口跡は大手口と推され、その規模は内側の幅で東西8.3m、南北8.7m、外側の幅で東西10.4m、南北15.1m、残存高1.1mを計る。積石は拳～人頭大の大きさの自然石を斜面にそのまま積み上げており、西・北側石積の側面は意識的に大きな面石を使用している。

また本丸北西側の掘切直下に設けられた石積虎口跡は、平面形が菱形を呈し、南側に石積の張り出しが付いていて、搦手口の虎口跡と推される。規模は内側の幅で東西8.3m、南北11.0m、外側の幅で東西14.7m、南北16.7m、残存高1.2mを計り、積石は前者同様、拳～人頭大の大きさの自然石を積み上げているが、西側側面には比較的大きな石が用いられている。

b. 本丸・虎口跡 ②

本丸を一周する土塁は、東側・西側中央と分郭に接する南西側に途切れた箇所が認められる。東側中央部分は、幅3.3mを計り、南東側へ下りながら東側斜面を南北に伸びる帯郭に通じていることから大手虎口跡と考えられる。

南西部分の虎口は、幅1.5m、奥行き5.0mを計り、南北の側壁には2～3段と階段上に人頭大で角張った自然石が踏面と側面を揃えて積み上げられおり、周囲の土塁基底部内側にも上面と側面の面を揃えて並べられた根巻石が、南側に6.2m、北側に1m以上確認された。

c. 柵列跡 ③

北郭の西側斜面には、小さな土塁と布掘りの細長い溝によって柵列跡が築かれている。その規模は上段の土塁が基底幅2.5m、高さ20cm、二段目の土塁が基底幅1.8m、高さ9cmを計り、これに平行する溝跡は、幅63cm、深さ30cmを計り、断面形は何れもU字形を呈し、堆積土中には所々に人頭大の自然石がみられる。



大手口石積虎口跡



搦手口石積虎口跡



本丸南西虎口跡



柵列跡



鶴峰城跡地形図



土津神社神料所田図 明和元年(1764) 土津神社所蔵

編集 兼田芳宏